

訳されているが、一般には集会の書という名で知られているもので、現行聖書中の Ecclesiasticus, すなわち伝道の書ではないこというまでもない。さて、この aspalathus だがこれはリンネの Genera plantarum の属名 *Aspalathus* とは全々関係はない。また上述の日本聖公会の訳本では、わかってか、わからないからか、「アスパラトの木」と訳してある。集会の書中には、たゞ一回でてくる字だというのが、これに判決を下すことができるかどうか?

次は出エジプト記の manna と関係づける考え方であって、これには、いろいろなものが登場してきて甲論乙駁の状態である。本誌 5 巻 (1928) 8 号に写真の出ている *Lecanora esculenta* Eversm., *L. affinis* Eversm. のような地衣の種類だとか、アブラムシの分泌する honey-dew つまり、我国でも知られている初夏に広葉の上に見られる甘露のようなもので *Coccus manniparus* の分泌物だとか、または、ある季節に大移動するウズラ類の鳥群の排泄物だとかいう人もあったし、*A. maurorum* だの、*Tamarix mannifera* Bunge, *Fraxinus ornus* L. などマンナの原料として数えられている。そのなかで、*F. ornus* などは日本薬局方第 4 版にも医薬としたことがあるが、聖書のもと同じかどうかはわからない。そこで *A. maurorum* がなぜここに引合いに出されたかという、この根に甘味物質があるとかで、C. W. Weimer: die Pflanzenstoffe (1929) にも Mannaklee という名で *A. camelorum*, Kameldorn と共に理由があるらしいことを Jour. Amer. Chem. Soc. 1918 を引用摘記しているが、どの程度正確に同定された原料のものかわからないから、一応承知しておくだけのことである。由来古典の植物を判定することは容易な芸当ではない。

いろいろな横道に這入って見たが我々はこの植物がなんであるか、Camel's thorn はなにを指すのか、それでよいと思う。なを国立科学博物館には、小林採品の外、かつて久保田礼治氏が採集寄贈された *A. maurorum* と、外国との交換で送られてきた *A. camelorum* とが蔵されている。

#### C 高等植物分布資料 (68) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (68)

○ナガバコウラボシ *Grammitis nipponica* Tagawa et K. Iwatsuki 1969 年 6 月 8 日、三重県鈴鹿郡加太不動滝の溪側のエノキ、ツバキ等の疎林下の岩上 (基岩は古生層硬砂岩)、標高約 250 m のところで採集した。従来の分布は、佐賀、熊本、高知、和歌山、静岡の諸県と、屋久島、八丈島、御蔵島、硫黄島等の島嶼で、県内で未だ記録がないので稀品と考え報告する。

胞子嚢群は主脈に対して斜めに着き、若い頃は長楕円形黄色を呈しているが、生育が進むに従い暗緑色に変わり、のち円形に近づき褐色を帯びている。附図左端の先端の破損した羽片に胞子のう堆が見られる。着生地は傾斜が非常に急峻で、ハイゴケ、



Fig. 1. *Grammitis nipponica* Tagawa et K. Iwatsuki, on sandy rock, under the sparse crown of *Celtis sinensis* v. *japonica* and *Camellia japonica*, by Fudô Fall, Kata, Suzuka-gun, Mie Prefecture. The leftmost frond broken at the upper portion bears sori. Sept. 6, 1969. Photo K. Mango.

チャボシラガゴケ、オオムチゴケ、ノコギリフタエウロコゴケ等の 藓苔類が周辺に散生していた。溪谷の岩の間が比較的風当りが弱く暖かい場所のため、南方系の本種が冬期枯葉しないで越冬可能かと思われる。分布について御教示賜わった 瀬戸剛先生に深謝致します。

(三重県立上野高校 菊山文秀)

○シャクナゲとツツジの呼び方について (山崎 敬) Takasi YAMAZAKI: On Japanese vernacular names of *Rhododendron*, 'Shakunage and Tsutsuzi'

最近、東京山草会から「シャクナゲとツツジ」という本が出版された。その中で新しい主張がなされている。従来から呼ばれていたヒカゲツツジ、サカイツツジ、ゲンカイツツジ、エゾムラサキツツジを ツツジの類とするのは誤りで、シャクナゲの仲間で